

資料

主体的学修を促す基礎看護技術演習における  
学ぶ意識と行動の現状  
—〈自己学習－グループ学習－個別指導－自己評価〉  
システムを導入して—

Current State of Consciousness and Behavior to Learn of the Introduction of a System for  
“Self-Learning, Group Learning, Individual Guidance and Self-Evaluation”

河野かおり<sup>1)</sup> 板倉朋世<sup>1)</sup> 遠藤恭子<sup>1)</sup>  
草刈由美子<sup>1)</sup> 山口久美子<sup>1)</sup> 石綿啓子<sup>2)</sup>  
Kaori Kono<sup>1)</sup> Tomoyo Itakura<sup>1)</sup> Kyoko Endo<sup>1)</sup>  
Yumiko Kusakari<sup>1)</sup> Kumiko Yamaguchi<sup>1)</sup> Keiko Ishiwata<sup>2)</sup>

- 1) 獨協医科大学看護学部  
2) 国際医療福祉大学保健医療学部看護学科  
1) Dokkyo Medical University School of Nursing  
2) International University of Health and Welfare

要 旨

【目的】平成27年度の基礎看護技術演習では、学生の主体的学修を促すために〈自己学習－グループ学習－個別指導－自己評価〉システムを取り入れた。この学習システムを導入後の学生の学ぶ意識と行動の現状を調査することを目的とした。

【方法】看護系A大学1年次生102名を対象として、基礎看護技術演習への取り組み、学習支援ツールとしてのiPadの使用について独自作成のアンケートを用いてLearning Management System(以下LMS)にて調査した。分析は、記述統計とカテゴリー分類を行った。

【結果】研究の同意が得られたのは99名であった。基礎看護技術演習への取り組み：自己学習時間は平均1～2時間であり、学生同士の技術チェックでは「他者の良い援助や患者への配慮」について気づくとともに「自己の不足点」にも気づき、学生の99%が学習に役立つと回答していた。自己評価については、演習後に自己課題が明確になったが98%、自己課題解決のための学習方法が明確になったが88.9%であり「反復練習」や「動画や教科書、資料を見返す」が多かった。学習を継続できない者は11.1%でその要因として「1人で行うことが難しい」「演習時のみの学習で終わる」等であった。iPadの使用状況：学生の90.9%が看護技術演習時の動画撮影ができており、72.7%が看護技術演習時の録画を演習の後に振り返って見ていた。また、89.9%が看護技術演習時の録画が学習に役立っていた。

【結論】基礎看護技術演習に新しい学習システムを導入した結果、学生はグループ学習を通して看護技術を学び、技術チェックでは他者の援助を観察し、自己の看護援助を振り返っていた。今後は、導入した学習システムにおける学生の学ぶ意識や行動についてさらに詳細に検討することが課題である。

キーワード：基礎看護技術教育，主体的学修，グループ学習，授業評価

## I. 緒言

現代社会において，急速な医学・医療の進歩，人口の高齢化，保健医療を取り巻く環境の変化に伴い，これらの多様なニーズに対応しうる資質の高い看護職の養成が求められている．看護学教育は，「確固たる倫理観に基づき，看護学に求められる社会的使命を有効に遂行し，生涯に亘り自己の資質の向上に努めることのできる看護専門職を育成する」<sup>1)</sup> ことを目的としており，看護職としての基本的知識や技術の修得のみではなく，生涯にわたる主体的学修力，科学的思考力と倫理的判断力を育成することを重視している．

看護系 A 大学の教育目標には，看護の対象を総合的に理解し，科学的な知識に基づいた援助が実践できる能力を高めること，生涯にわたり専門性を高めていくための主体的学修能力を養うこと，看護の質の向上に貢献できる臨床看護実践能力を育成することが掲げられている．これらの目標を達成するためには，基礎学習を基盤として，変化に適応できる力，自ら考え行動する力，学び続ける力の養成が必要であり，他領域においても，成育看護の授業にアクティブラーニングを試行し，授業改善を行っている<sup>2)</sup>．

これまでの基礎看護技術演習<sup>3)</sup> (図1) では，以下の課題が挙げられていた<sup>4)</sup>．1つ目は，講義時間において前提知識の確認や新たな知識を

学ぶ時間および視聴覚映像を活用する時間の不足，2つ目は学生の主体的な事前学習不足により，演習で何をすべきか把握できず，演習時間内に1回技術を経験するのみで，技術のレベルを高められないこと，3つ目は自ら考えて看護技術を実施できないこと，4つ目は技術試験の課題以外の到達度チェックができていないという点であった．

以上の課題を踏まえて，平成27年度の基礎看護技術演習では，学生の主体的学修を促す演習デザインとした(図2)．具体的には，学生が行動に先立ち自己の頭脳に看護技術の目的と具体的な行為の関連を描き，その像に導かれ看護者と対象との立場を変換しながら繰り返し技術を身につけることにより，看護技術を効率的に修得できるような教育を実践していく(自己学習-グループ学習-個別指導-自己評価)システム<sup>5,6)</sup>を取り入れた(図3)．この学習システムの目標は，技術の手順を覚えて実践するという点ではなく，対象の状況に応じて科学的根拠を基にした看護技術を実践し，実践した看護技術の自己評価をし，看護技術の修得レベルを上げるための学習を継続することである．

今回は，(自己学習-グループ学習-個別指導-自己評価)システムを取り入れた基礎看護技術演習における学生の学ぶ意識と行動の現状を調査し，主体的学修を促す授業を構築する示唆を得たため報告する．

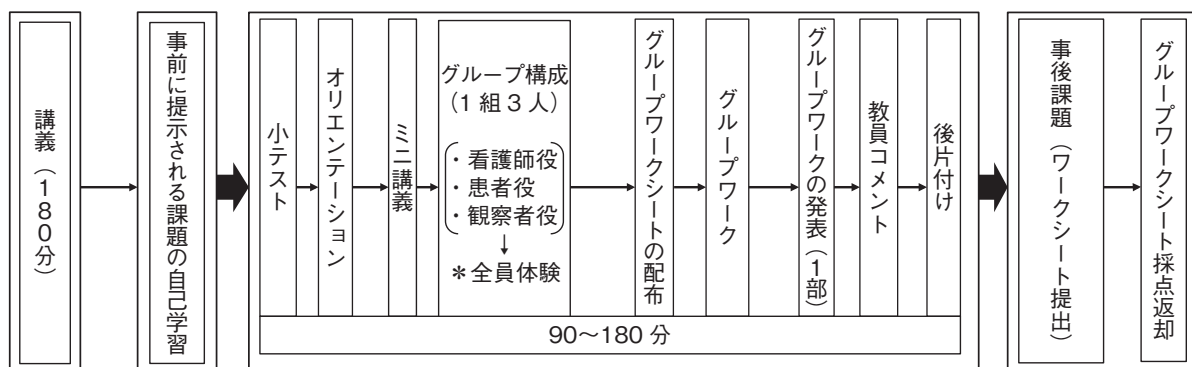


図1 平成26年度 看護方法論演習I・IIの実際

文献3) p32の図1を著者の承諾を得て引用・一部改変

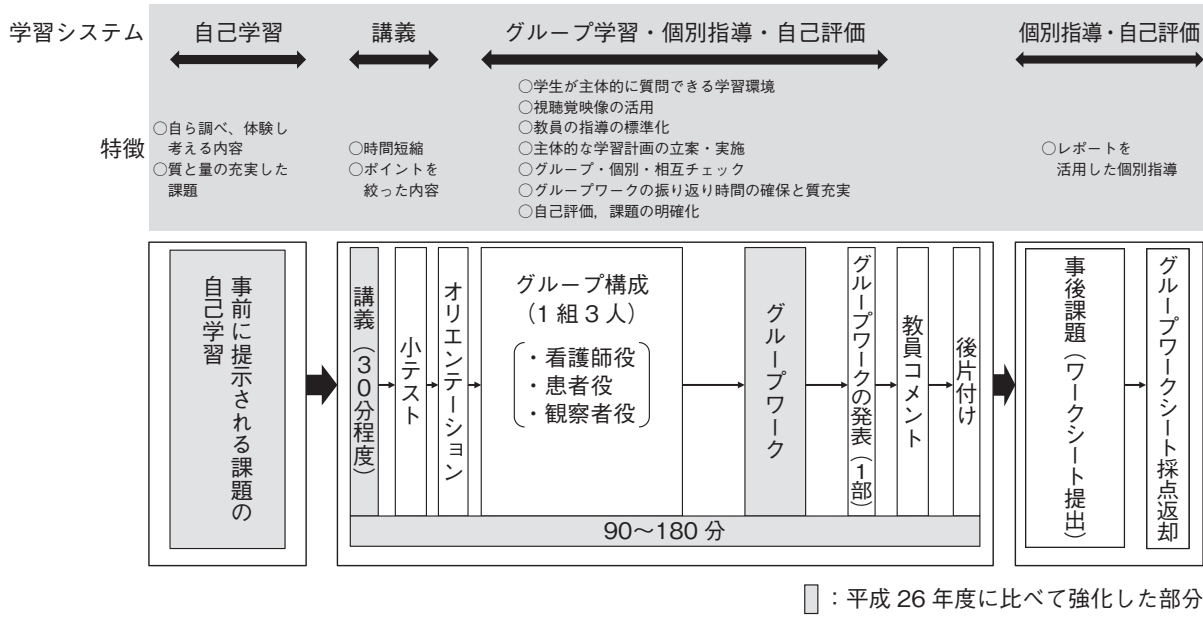


図2 平成 27 年度 看護方法論演習 I・II の実際

文献 3) p32 の図 1 を著者の承諾を得て引用・一部改変

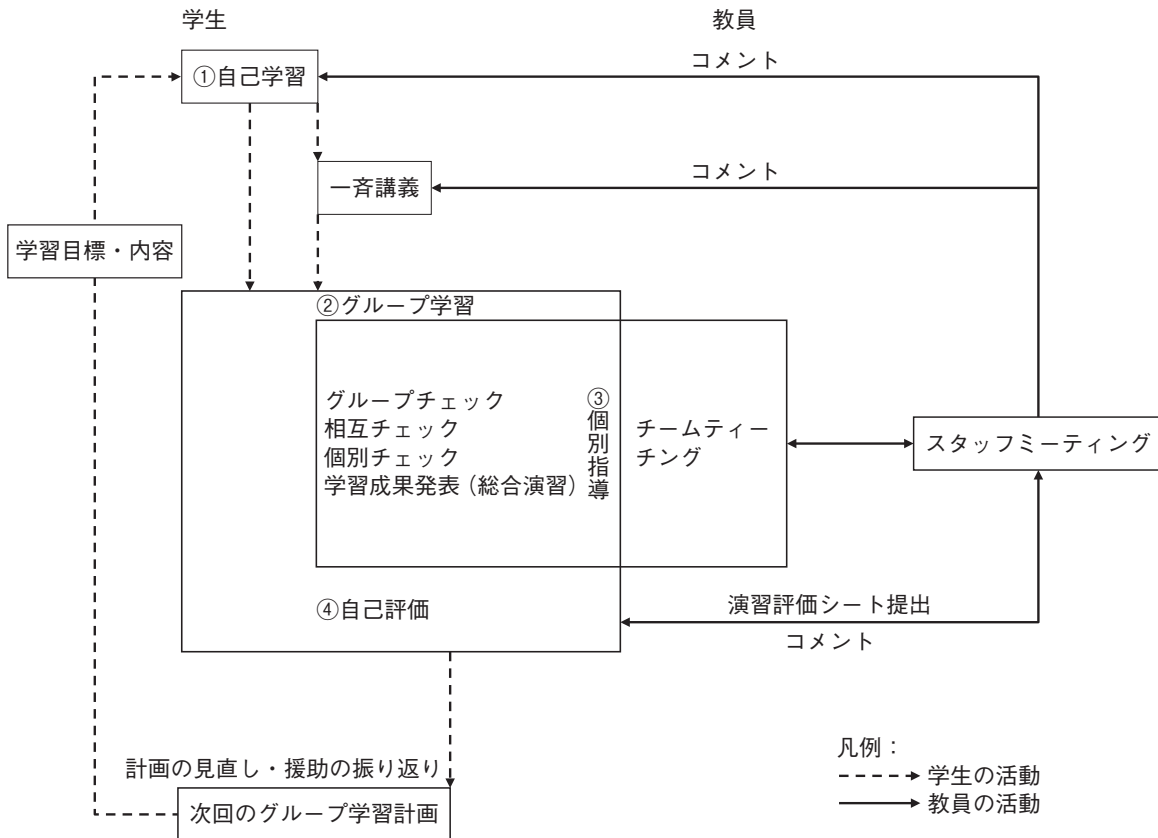


図3 〈自己学習—グループ学習—個別指導—自己評価〉システムによる授業展開

文献 6) 図 2 を著者の承諾を得て引用・一部改変

## II. 用語の定義

主体的学修：授業のための事前の準備（資料の下調べや読書，思考，学生同士のディスカッション，他の専門家等とのコミュニケーション等），授業の受講や事後の展開（授業内容の確認や理解の深化のための探求等）といった能動的な学びの過程<sup>7)</sup>と定義する。

## III. 研究方法

### 1. 対象者

看護系 A 大学の平成 27 年度 1 年次生 102 名のうち研究協力の同意が得られた者。

### 2. 演習期間

1) 看護方法論演習 I（日常生活援助方法）：  
平成 27 年 4 月 6 日～7 月 23 日

2) 看護方法論演習 II（診断－治療支援方法）：  
平成 27 年 10 月 2 日～平成 28 年 1 月 22 日  
なお，授業は 1 時限（1 コマ）を 90 分間としている。

### 3. 調査方法

#### 1) データ収集時期

看護方法論演習 II 終了後の平成 28 年 1 月 26 日

新たな学習システムを取り入れての学生の学ぶ意識と行動の現状を 1 年間の授業終了時に調査した。

#### 2) データ収集方法

看護方法論演習 II 終了後，科目のまとめを行う学習日に，LMS にてアンケート調査を行った。本研究について科目担当者が研究の趣旨，目的，成績評価には一切無関係なことを，アンケート調査への協力は学生の自由意思に基づいていることを文書と口頭で説明した。同意する場合は，同意書の同意欄を丸印で囲んでもらい，すべての説明と同意書への記入が終了した後に同意書を回収し，基礎看護学領域に属さない第三者が，LMS 内にて同意した学生のデータのみを抽出し，その後，学籍番号と氏名を削除したデータを本研究のデータとした。

#### 3) 調査内容

##### (1) 学生の学ぶ意識

①基礎看護技術演習への取り組みについて

自己学習，グループ学習，個別指導，自己評価について「非常にできた」「まあまあできた」「あまりできなかった」「ほとんどできなかった」の 4 件法で調査した。

##### ② iPad による看護技術演習時の録画

看護技術演習時に動画撮影ができたか，看護技術演習時の録画は演習の後に振り返って見ているか，録画は学習に役立ったかを「とてもできた」「ある程度できた」「あまりできなかった」「ほとんどできなかった」の 4 件法で調査した。

##### (2) 学生の行動の現状

①学生同士の技術チェックにおける観察者としての気づき

アンケート用紙において自由記載で調査した。

②学習を継続する方法，継続学習が困難な理由

アンケート用紙において自由記載で調査した。

##### 4. 分析方法

量的データは Excel 2013 を用いて，単純集計を行い，質的データは，解釈の偏りを防ぐために基礎看護学領域内の教員複数で，自由記載の意味を損なわないよう意味の類似性に沿って整理し，カテゴリー分類を行った。

##### 5. 倫理的配慮

学生に対して，研究の趣旨と目的，研究協力は自由意思であること，匿名性を約束すること，研究協力や質問紙の回答内容は成績とは無関係であること，学術集会での発表や論文への投稿をすること，その際は匿名性を確保することを説明した。基礎看護学領域に属さない第三者が LMS から研究データを取り出した。また，データは認証機能付き電子媒体に保存し，施錠できる場所で保管した。なお，本研究は獨協医科大学看護研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：看 27024）。

## IV. 結果

1 年次生 102 名のうち研究協力の同意が得られた 99 名の質問紙の回答を対象とした。

表1 基礎看護技術演習への取り組み

N=99人

学習システム	項目	回答	人	(%)
自己学習	各单元前に提示される課題について自己学習を行った時間はどれ位でしたか	30分未満	3	(3.0)
		30分～1時間未満	31	(31.3)
		1時間～2時間未満	45	(45.5)
		2時間以上	20	(20.2)
	自主練習のために基礎看護学実習室を使用した回数はどれくらいでしたか	5回以下	34	(34.3)
		6～10回	44	(44.4)
		11～19回	14	(14.1)
		20回以上	7	(7.1)
		平均回数：8回		
	基礎看護学実習室を1回で使用する時間はどれくらいでしたか	30分以内	5	(5.1)
		30～60分	44	(44.4)
		60～90分	47	(47.5)
120分以上		3	(3.0)	
平均時間：82分				
グループ学習 (計画立案)	学習目標を達成するためにグループ内で話し合い計画を立てて実施できましたか	非常にできた	41	(41.4)
		まあまあできた	49	(49.5)
		あまりできなかった	6	(6.1)
		ほとんどできなかった	3	(3.0)
グループ学習 (教員の指導・個別指導)	单元ごとに行われた講義内容で基礎的な知識を理解できましたか	非常にできた	16	(16.2)
		まあまあできた	80	(80.8)
		あまりできなかった	2	(2.0)
		ほとんどできなかった	1	(1.0)
	演習中の教員の指導は、学習目標を達成する助けになりましたか	非常に良かった	62	(62.8)
		まあまあ良かった	35	(35.4)
		あまりならなかった	1	(1.0)
		ほとんどならなかった	1	(1.0)
		单元ごとの演習評価シートへの教員からのコメントは学習に役立ちましたか	非常に役立った	43
まあまあ役立った	45	(45.5)		
あまり役立たなかった	10	(10.1)		
ほとんど役立たなかった	1	(1.0)		
グループ学習 (技術チェック)	看護援助を観察した際、気づいたことを他者に伝えることはできましたか	非常にできた	43	(43.4)
		まあまあできた	55	(55.6)
		あまりできなかった	1	(1.0)
		ほとんどできなかった	0	(0.0)
	看護援助を振り返る際、他者からの意見は学習に役立ちましたか	非常に役立った	78	(78.8)
		まあまあ役立った	20	(20.2)
		あまり役立たなかった	1	(1.0)
		ほとんど役立たなかった	0	(0.0)
自己評価	演習を終えて自己課題が明確になりましたか	非常に良かった	36	(36.4)
		まあまあ良かった	61	(61.8)
		あまりならなかった	2	(2.0)
		ほとんどならなかった	0	(0.0)
	自己課題解決のための学習方法が分かりましたか	非常に分かった	13	(13.1)
		まあまあ分かった	75	(75.8)
		あまり分からなかった	11	(11.1)
今後も自己課題を解決するために学習を継続できると思いますか	思う	88	(88.9)	
	思わない	11	(11.1)	



表2 学生同士の技術チェックにおける観察者としての気づき（複数回答）

回答数=99人

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（記載より抜粋）	コード数
自己評価	自己の不足点	客観的に見ることで不十分な点を見つけることができた	47件
	自己の客観視	自分ができている部分、自分ができていない部分が明確になった 援助や声掛けが的確に行われているか客観的にみることができた	
	援助中には気づかないことに気づく	自分が援助を行っている時には気づかなかったことや、自分達では気がつかなかったことに気づくことができた 自分で同じ技術を行っていた時に気づかなかったことに気付くことができた。また、そこから改善方法などを考えることにもつながった	
他者評価	良い援助	自分が考えていなかった他のグループの良い援助や配慮に気づいた お互いのグループまたは個人で比較しあって、より良い援助や方法、配慮を導き出すことができる	49件
	不適切な援助	援助している側が気づかないうちに清潔を保持できていなかったり、患者ではなく自分の手元に集中していること	
看護に正解はない	様々な援助方法がある	自分と援助の方法が違うところがあって、いろいろな考え方があったと感じた	3件
患者の気持ちに寄り添う	患者の立場に立つ	患者の気持ち分かる	2件
援助の効率性	物品配置	ワゴンの置き方や物品の配置次第で援助の進むスピードに差が出る	2件
患者の安楽	患者が快適に過ごす	看護師が援助の目的となる直接の技術以外に、患者が快適でいられるように考えてプラスした技術があるかないかの差を感じた	2件
看護師が与える印象	看護師の不安な表情	看護師役がすごく不安そうな顔をしていることに気がついた	1件
シミュレーションの大切さ	患者と自分の動きをシミュレーションする	練習回数も大切であるが、頭の中で自分、仲間の動き、患者さんの表情を考えシミュレーションすることが大切であると気づいた	1件

表3 学習を継続する方法（複数回答）

回答数=88人

方法	件数
教科書、動画（コンテンツ、援助場面の録画）を見る	30
患者のことを考える	23
毎日の予習・復習、実習を意識する	23
モチベーションを上げる	17
友人と確認しあう	13
反復練習	9
好奇心を大切にす	1
自己課題の明確化	1
努力する	1
自分の不足点を意識する	1
課題に取り組む	1
座学と実践をつなげる	1
自分の将来を考える	1
危機感を持つ	1
反省点をメモする	1
知識不足の自覚	1
他者に相談する	1

表4 継続学習が困難な要因（複数回答）

回答数=11人

要因	件数
他の科目の課題がある	4
1人では技術練習ができない	3
授業以外にやらない	2
部活	1
2年生の時間割がうまっている	1
演習室開放時間	1
学習方法が不明で精神的に弱い自分	1

## 1. 基礎看護技術演習への取り組み(表1, 2, 3, 4)

### 1) 自己学習

各単元前に提示される課題についての自己学習時間は、1時間以上2時間未満が45.5%と、約半数を占めており、30分～1時間未満が31.3%、2時間以上が20.2%であった。また、学生が授業の空き時間等を利用し、看護技術の練習をするために授業以外に基礎看護学実習室を使用した回数は、1年間の平均が8回(最高20回、最低3回)であった。1回あたりの使用時間は平均82分(最高180分、最低30分)であった。なお、基礎看護学実習室の使用回数は、その単元に該当する演習のための使用に限定せず、学生が希望する看護技術の練習のために使用した回数を指している。

### 2) 計画立案・教員の個別指導・技術チェック・自己評価

#### (1) グループ学習

グループ学習の計画立案について「学習目標を達成するためにグループ内で話し合い、計画を立てて実施できましたか」については、「非常にできた」が41.4%、「まあまあできた」が49.5%であった。

#### (2) 教員から学生への講義・個別指導

「講義内容で当該単元の基礎的な知識を理解できましたか」は、「非常にできた」が16.2%、「まあまあできた」が80.8%であった。「演習中の教員の指導は、学習目標を達成する助けになりましたか」は、「非常に良かった」が62.8%、「まあまあ良かった」が35.4%であった。「演習評価シートへの教員からのコメントは学習に役立ちましたか」は「非常に役立った」が43.4%、「まあまあ役立った」が45.5%であった。

#### (3) 学生同士の技術チェック

「看護援助を観察した際、気づいたことを他者に伝えることはできましたか」は、「非常にできた」が43.4%、「まあまあできた」が55.6%であった。「看護援助を振り返る際、他者からの意見は学習に役立ちましたか」は、「非常に役立った」が78.8%、「まあまあ役立った」が20.2%であった。

#### (4) 自己評価

「演習を終えて自己課題が明確になりましたか」は、「非常に良かった」が36.4%、「まあまあ良かった」が61.8%であった。「自己課題解決のための学習方法がわかりますか」は、「非常に良かった」が13.1%、「まあまあ良かった」が75.8%であった。「今後も自己課題を解決するために学習を継続できると思いますか」は、「思う」が88.9%、「思わない」が11.1%であった。

#### 3) 技術チェックにおける観察者としての気づき(表2)

自由記載より得られた看護援助を観察して気づいた内容について、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉, コードを「 」で示した。

看護援助を観察して気づいた内容については、【自己評価】【他者評価】【看護に正解はない】【患者の気持ちに寄り添う】【援助の効率性】【患者の安楽】【看護師が与える印象】【シミュレーションの大切さ】に分類された。

【自己評価】については、〈自己の不足点〉〈自己の客観視〉〈援助中には気づかないことに気づく〉の3サブカテゴリーで構成されていた。〈自己の不足点〉では、「客観的に見ることで不十分な点を見つけることができた」などの記述があり、〈自己の客観視〉では、「自分ができている部分、自分ができていない部分が明確になった」や「援助や声掛けが的確に行われているか客観的にみることができた」などの記述があった。また、〈援助中には気づかないことに気づく〉では、「自分が援助を行っている時には気づかなかったことや、自分達では気がつかなかったことに気づくことができた」「自分で同じ技術を行っていた時に気づかなかったことに気付くことができた。また、そこから改善方法などを考えることにもつながった」等の記述があった。【他者評価】については、〈良い援助〉〈不適切な援助〉の2サブカテゴリーで構成されていた。〈良い援助〉では、「自分が考えていなかった他のグループの良い援助や配慮に気づいた。お互いのグループまたは個人で比較しあって、より良い援助や方法、配慮を導き出すことができる」等の記述があり、〈不適切な援助〉

表5 iPadによる看護技術演習時の録画

質問項目	回答	*平成 26 年度 N=97 人	平成 27 年度 N=99 人
		人 (%)	人 (%)
看護技術演習時に動画撮影が できましたか	とても撮影できた	14 (14.4)	42 (42.4)
	ある程度撮影できた	39 (40.2)	48 (48.5)
	あまり撮影しなかった	42 (43.3)	8 ( 8.1)
	全く撮影しなかった	2 ( 2.1)	1 ( 1.0)
看護技術演習時の録画は演習の後に 振り返って見えていますか	とても見ている	6 ( 6.2)	21 (21.2)
	ある程度見ている	33 (34.0)	51 (51.5)
	あまり見ていない	44 (45.4)	23 (23.2)
	全く見ていない	14 (14.4)	4 ( 4.0)
看護技術演習時の録画は学習に 役立ちましたか	全くそう思う	13 (13.4)	37 (37.4)
	ある程度そう思う	48 (49.5)	52 (52.5)
	あまりそう思わない	31 (32.0)	6 ( 6.1)
	全くそう思う思わない	5 ( 5.2)	4 ( 4.0)

注) \*印のデータは文献3) p37表4より引用

では「援助している側が気づかないうちに清潔を保持できていなかったり、患者ではなく自分の手元に集中していること」等の記述があった。【看護に正解はない】については、〈様々な援助方法がある〉のサブカテゴリーに分類され、「自分と援助の方法が違うところがあって、いろいろな考え方があると感じた」等の記述があった。【患者の気持ちに寄り添う】は〈患者の立場に立つ〉のサブカテゴリーに分類され、「患者の気持ちが分かる」等の記述があった。【援助の効率性】は〈物品配置〉のサブカテゴリーに分類され、「ワゴンの置き方や物品の配置次第で援助の進むスピードに差が出る」等の記述があった。【患者の安楽】については、〈患者が快適に過ごす〉のサブカテゴリーで「看護師が援助の目的となる直接の技術以外に、患者が快適でいられるように考えてプラスした技術があるかないかの差を感じた」との記述であり、【看護師が与える印象】は〈看護師の不安な表情〉のサブカテゴリーで「看護師役がすごく不安そうな顔をしていることに気がついた」の記述があり、【シミュレーションの大切さ】は〈患者と自分の動きをシミュレーションする〉のサブカテゴリーで「練習回数も大切であるが、頭の中で自分、仲間の動き、患者さんの表情を考えシミュレーションすることが大切であると気づいた」という記述でそれぞれ1件ずつであった。

4) 学習を継続する方法と継続学習が困難な要因 (表3, 4)

学習を継続する方法としては、「教科書、動画 (コンテンツ, 援助場面の録画) を見る」が30件, 「患者のことを考える」が23件, 「毎日の予習・復習, 実習を意識する」が23件, 「モチベーションを上げる」が17件, 「友人と確認しあう」が13件であった。継続学習が困難な要因は, 「他の科目の課題がある」が4件, 「1人では技術練習ができない」が3件, 「授業以外にやらない」が2件であった。

2. iPadによる看護技術演習時の録画 (表5)

「看護技術演習時に動画撮影ができましたか」は「とても撮影できた」「ある程度撮影できた」を合わせると90.9%であり, 「看護技術演習時の録画は演習の後に振り返って見えていますか」は「とても見ている」「ある程度見ている」を合わせると72.7%であった。また, 「看護技術演習時の録画は学習に役立ちましたか」は「全くそう思う」「ある程度そう思う」を合わせると89.9%であった。

## V. 考察

本研究では, 1年次生を対象として基礎看護技術演習に〈自己学習-グループ学習-個別指導-自己評価〉システムを導入した学生の学びの現状を調査した。



この学習システムは、学生個々が自己学習を行い、その成果をグループに持ち寄り、メンバーの持てる力を生かし合いながら技術修得レベルの向上に取り組むグループ学習、その過程で必要に応じて教員の個別指導を受けながら、技術のレベルを上げる個別指導、自己評価能力を高める自己評価から成り立っている<sup>8)</sup>。

#### 1. 学習システム導入後の従来の課題について

従来の基礎看護技術演習で挙げられていた課題は4つあった。今回導入した学習システムがこれらの課題を解決したか否かを今回の調査方法で判断することは困難であるが、従来の課題に焦点をあてて考察を進める。1つ目の課題は、講義時間内での前提知識の確認や新たな知識を学ぶ時間、および視聴覚映像を活用する時間の不足であった。従来の授業では、単元毎に180分間の講義を行い、その後演習をするという形式であった。講義は教員から学生への知識の提供に重きを置いていたが、学習システム導入後は、演習前に提示される自己学習内容のボリュームを増やし、講義時間を30分程度に短縮し最重要ポイントとなる知識のみを教授した。自己学習の内容は、当該単元の基礎知識の学習や、iPadを活用した動画コンテンツの視聴、看護援助の手順や根拠、留意点の確認、看護技術の具体的な行為とその目的の関連をノートに記載して演習時に持参する、といった内容である。今回の調査結果では、単元毎の自己学習時間が1時間以上2時間未満だった学生が全体の約半数であった。この結果は、山田ら<sup>9)</sup>が調査した、学生が演習前の自己学習に要する時間と同様の結果であった。また、「講義内容で当該単元の基礎的な知識を理解できたか」は、「非常にできた」と「まあまあできた」を合わせ97%であった。この調査結果から、学生は演習前の自己学習において、当該単元に必要な基礎知識を学習した上で演習に臨んでおり、30分間に短縮した講義で基礎知識の理解ができていたと推測する。しかし、本当に基礎知識の理解をしていたのか、知識の定着度はどれほどだったのかについては、小テストの点数等の指標を用いた評価が必要であり、今後検討していき

たい。

視聴覚映像を活用する時間の不足という課題については、学生が動画コンテンツ等の視聴覚映像の活用時間を調査していないため、この課題を解決したか否かは不明である。しかし、iPad使用状況についての調査の結果から、看護技術演習時の動画撮影について「とても撮影できた」「ある程度撮影できた」を合わせると90.9%とほぼ全員が動画撮影しており、演習後の録画視聴については「とても見ている」「ある程度見ている」を合わせると72.7%と半数以上の学生が録画視聴していた。また学習への役立ちについては「全くそう思う」「ある程度そう思う」を合わせると89.9%と概ねほとんどの学生が学習に役立ったと回答しており、自己の看護援助を振り返る1つのツールとしてiPadの動画撮影が活用されていたと推測する。

2つ目の課題は、学生の自己学習不足により、演習で何をすべきか把握できず、演習時間内に1回技術を経験するのみで、技術のレベルを高められないことであった。今回の結果から、授業時間以外で技術練習のために基礎看護学実習室を使用した回数は、平均8回/年であり、1回あたりの平均使用時間は82分間であった。基礎看護技術演習では1年を通して、グループチェック2回、学生同士の相互チェック1回、教員が行う個別チェック5回の計8回の技術チェックを行っている。今回は、基礎看護学実習室での技術練習の内容を調査していないため推測の域を出ないが、回数のみをみると、特に技術チェック前に技術練習に励んでいたのではないかと考えられ、1回あたりの使用時間も1時間分に相当する時間であり、空き時間等を利用していったといえる。「学習目標を達成するためにグループ内で話し合い計画を立てて実施できたか」では、90.9%の学生が「できた」と回答していたことから、少なくとも、演習で何をすべきか把握した上で演習に臨んでいたと考える。また、技術のレベルを高められない、という課題については、演習毎に実践した技術のレベルを評価していないため、演習を重ねるごとに学生の技術のレベルが高まっていたかどうか

は不明である。しかし、看護技術を身につける演習の他に、単元毎に技術チェックを行っていたことが、学生が自己の技術レベルを高めることに何らかの影響を及ぼしたと考える。技術チェックでは、看護援助を行うグループを他のグループが観察し、看護援助場面を共に振り返っている。演習の中では、看護師役の他、患者役、観察者役になることで、それぞれの役からの視点で看護援助を評価し、ディスカッションを行っている。今回の質問紙調査の中で、「看護援助を観察した際、気づいたことを他者に伝えることはできたか」は、ほぼ全員が「できた」と回答していた。さらに、「看護援助を振り返る際、他者からの意見は学習に役立ったか」は、ほぼ全員が「役立った」と回答していた。看護援助を観察して気づいた内容の多くは、〈自己の不足点〉〈自己の客観視〉〈援助中には気づかないことに気づく〉といった【自己評価】や、〈良い援助〉〈不適切な援助〉といった【他者評価】であった。学生は、他者の看護援助場面からの気づきがあり、その観察場面からさらに自分が実践した看護援助場面を想起し、自己の看護技術の不足点や、援助中には自分で気づけなかった点に気づくという体験をしていた。そしてこれらの気づきを相手に伝え、相手からの意見を自分の学習に役立たせていた。道廣ら<sup>10)</sup>はグループ学習では、探究心や創造的・柔軟な思考、自己開示スキルが磨かれると述べている。導入した学習システムにおけるグループ学習では、看護技術の習得だけでなく、コミュニケーション能力や、協調性、自己評価能力の育成にも寄与したのではないかと考える。しかし、技術チェックで自己の看護援助を振り返った後の技術練習状況や、技術レベルの変化を調査していないため、これらの評価方法を検討してさらなる調査を行いたい。

3つ目の課題は、学生が自ら考えて看護技術を実施できないことであった。導入した学習システムは、学生が行動に先立ち自己の頭脳に看護技術の目的と具体的な行為の関連を描きながら技術を身につけるシステムであるが、学生がどのように、そしてどの程度考えて看護技術を

実施していたのかを今回は調査していないため3つ目の課題については検討ができていない。4つ目の課題は、技術試験で行う看護技術以外の到達度チェックができていないことであったが、学習システム導入後からは、単元毎の技術チェックを行っていた。しかし、教員が考える望ましい到達レベルを領域内で詳細に検討し、実際の学生の到達レベルの相違を評価し、その相違の差を小さくする教授方法について検討する必要がある。演習終了後も学生が継続して看護技術のレベルを向上できる学習システムを考える必要がある。

## 2. 学習システム導入後の新たな課題

前述の考察1.では、従来の演習における課題に対する学習システム導入の影響について述べたが、ここからは学習システム導入後に明らかとなった新たな課題について述べていく。

個別指導では、演習中や技術チェック後に学生の質問に答え、学生だけではつかみづらいポイントを明示し、デモンストレーションを行っている。また、技術チェック時には患者の安全や安楽が守られていない場面について教員が指導している。このことから看護技術の具体的な行為とその行為を行う目的が学生の頭脳に関連付けられ、看護技術を正確に修得していく過程をたどる。「演習中の教員の指導は、学習目標を達成する助けになりましたか」は、98.2%の学生が「なった」と回答していた。また、従来に比べて時間を短縮し、最重要ポイントの提示に重点を置いた講義については、97%の学生が「理解できた」と回答しており、「演習評価シートへの教員からのコメントは学習に役立ちましたか」は88.9%の学生が「役立った」と回答していた。しかし、教員からのコメントがこの学習システムの目標である「対象の状況に応じて科学的根拠を基にした看護技術の実践」、「実践した看護技術の自己評価」、「自己学習の継続」のいずれに役立ったのかを具体的に調査していないため、今後明らかにする必要がある。また、今回導入した学習システムは単元ごとに繰り返されているが、調査は授業終了後の1回のみであった。アンケートへの回答が、調査時期に近

い最終授業の影響を受けている可能性も考えられる。今後は、教員の指導や演習評価シートへのコメント、グループ学習内容について、単元ごとの変化を調査し、学生の学びの現状を詳細に分析する必要がある。

また、技術チェックでは、技術の修得状況を把握しつつ修得レベルを上げると共に、学生の自己評価能力を高め、自己課題の明確化を目指している<sup>11)</sup>。「演習を終えて自己課題が明確になったか」については、98.2%の学生が「なった」と回答していた。しかし、学生の自己課題の明確化について、今回導入した学習システムのプロセス自体が影響したのか、学習システムの中のグループ演習、技術チェックそれぞれが影響したのか、学習システムとは無関係な要因があったのかを本研究の結果から判断することはできない。今後は、自己課題が明確になる要因についても検討する必要がある。「自己課題解決のための学習方法」については、88.9%の学生が「分かった」と回答していた。「自己課題解決のために学習を継続できると思うか」は、「思う」と回答した者が88.9%、「思わない」と回答した者が11.1%であった。具体的な学習方法としては、「教科書や援助場面を録画した動画を見返す」「モチベーションを上げる」が多かった。一方、学習を継続できない要因は、「他の科目の課題がある」「1人では技術練習ができない」「授業以外にやらない」等が挙げられていた。継続学習が困難であると回答した学生は少数ではあるが、継続できない要因とこれから獲得すべき能力を関連させて考えると、看護職には、患者状況が変化中、優先順位を決定し物事を遂行する能力が必要であり、基礎看護教育を受ける時期からこのような能力の基盤となるものを形成する学習システムが必要であると考えられる。

また、津田ら<sup>12)</sup>によると、看護基本技術の修得初期段階における初学者の自己評価では、「実施体験を契機に認識と行動の両面から修得できていないことの自覚はするが、看護技術の目的・意味・行為のポイントが不明確で部分評価に留まる」という特徴があり、個別指導後は

「修得が実感できた体験を契機に自己評価の視点が定まり、自己の修得過程を振り返る過程で自己評価の質や妥当性が高まり、自己にあわせられた学習課題を見出す」という特徴が報告されている。看護技術は1度の演習のみで身につくものではなく、繰り返し練習して身につくものである。学生が、初期から看護技術の修得上のポイントを意識化し、繰り返し練習できるような教員の関わりが重要である。

また、大津<sup>13)</sup>によると、看護学生が基礎看護技術習得のために必要と認識した自己学習を遂行するための能力として、「友人と共同して練習できる能力」、「反復練習できる能力」、「練習中の技術習得状況を判断できる能力」、「練習中に学習資源を活用できる能力」、「自己学習にむけた計画を立てられる能力」、「効果的な自己学習を実施するための自己評価能力」を挙げている。看護技術教育においては、既習の看護技術を再び活用する看護技術も多いため、学生が技術の関連性と反復練習の必要性を理解し、実際の行動に移せるような学習システムの検討や動機付けが必要である。

## VI. 結語

基礎看護技術演習に〈自己学習－グループ学習－個別指導－自己評価〉システムを取り入れた結果

1. 約半数の学生は、1時間以上2時間未満の自己学習を行って授業に臨み、約90%の学生がグループで計画立案して演習を進めることができていた。
2. 従来に比べて時間を短縮しポイントを絞った講義では、97%の学生が「基礎的な知識を理解できた」という回答であった。
3. 技術チェックでは、自己および他者の看護援助場面から気づきがあり、学生のほぼ全員がそれを他者に伝えることができ、他者からの意見は学習の役に立っていた。
4. 学生が技術の関連性と反復練習の必要性を理解し、主体的に継続学習をする学習システムの検討や動機付けが必要である。
5. 新たに導入した学習システムにおける学生



の学ぶ意識や行動についてさらに詳細に検討することが課題である。

#### 謝辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に深く感謝致します。

本研究の一部は、日本看護学教育学会第26回学術集会（2016年，東京）にて一部を発表した。

#### 文献

- 1) 21世紀の看護学教育，大学基準協会資料第56号，平成14年9月。  
[http://www.juaa.or.jp/images/publication/pdf/about/01/21\\_century\\_nurse.pdf](http://www.juaa.or.jp/images/publication/pdf/about/01/21_century_nurse.pdf) (2016-12-27 アクセス)
- 2) 小口多美子，井上ひとみ，他：主体的学修能力を育成するための授業内容の改善の試み，獨協医科大学看護学部紀要，9，61-71，2015。
- 3) 草刈由美子，河野かおり，他：タブレット端末（iPad）を用いた基礎看護技術講義・演習の授業評価—学生のアンケート結果から—，獨協医科大学看護学部紀要，8，31-38，2014。
- 4) 板倉朋世：看護基本技術および看護過程の展開に関する教育方法の検討—千葉大学看護学部基礎看護学教育研究分野での研修を踏まえて—，獨協医科大学看護学部紀要，8，133-146，2014。
- 5) 前掲4) 136-141。
- 6) 嘉手苅英子：看護技術教育のシステム開発の試み〈自己学習—グループ学習—個別指導—自己評価〉システムによる技術教育の試み，Quality Nursing，1(9)，32-36，1995。
- 7) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～，文部科学省中央教育審会，1-9，平成24年8月28日。  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (2016-12-27 アクセス)
- 8) 前掲4) 136-141。
- 9) 山田章子，内田一美，他：静脈血採血の自己学習時間による技術習得状況の比較，山梨大学看護学会誌，11(2)，57-61，2013。
- 10) 道廣陸子，中桐佐智子，他：看護大学生のグループワーク達成感と批判的思考態度・社会的スキルとの関連，インターナショナル Nursing Care Research，13(1)，1-11，2014。
- 11) 前掲4) 141。
- 12) 津田智子，山岸仁美：看護基本技術の修得初期段階における初学者の自己評価の特徴，福岡県立大学看護学研究紀要，11(1)，1-10，2014。
- 13) 大津真季子：看護学士課程の学生がとらえた基礎看護技術習得にむけた自己学習能力，日本医療科学大学研究紀要，8，21-37，2016。